



バッハの森通信

第119号
2013年
4月20日発行

一般財団法人バッハの森

〒300-2635 茨城県つくば市東光台2-7-9 <http://www.bach.or.jp>

☎ 029-847-8696 / Fax 029-847-8699 e-mail : info@bach.or.jp

郵便振替 00380-4-16119 一般財団法人バッハの森



バッハの森の目標は 感動を分かち合う仲間作り

4月1日から、バッハの森の正式名称が、「財団法人筑波バッハの森文化財団」から「一般財団法人バッハの森」に変更されました。民法改正により、平成25年11月30日までに、新法人への移行手続きを完了しなければ解散したものとみなす、すなわち、バッハの森は消滅するという「お達し」があったのは6年前のことでした。それから何年にもわたる試行錯誤の末、ようやく見つけたコンサルタント会社に依頼して手伝ってもらい、莫大な費用と労力をかけ、有志メンバーの協力を得て、ようやく新法人に移行することができました。

まるで天災に遭遇したような新法人騒動でしたが、正式名称が少々変わっただけで、バッハの森に実質的な変化が起こったわけではありません。しかし、この際、創立以来28年経つうちに、大きく変化した日本社会とバッハの森はどのように向き合いながら、何を「目標」としていくべきか、仕切り直しをして考える良い機会ではないかと思うようになりました。

* * *

バッハの森の「目標」を改めて考えるために、先月3月20日に開いた「創立記念コンサート」の報告をします。(なお、本号2～3頁に掲載した「メディタツィオ」を参照してください)。コンサートの後でいろいろな方とお話しましたが、特に印象深かったのは、演奏に参加した多くのメンバーが共有した感動について語ってくださったことでした。

「あのメディタツィオを聞いたすぐ後では、胸がいっぱいで、歌うのが大変でした。」「涙が出そうなのを我慢して歌いました。」「最後のオルガンの演奏を聴きながら、アニュス・デイ(神の小羊、犠牲の小羊)の喜びの姿が見えてきました」。最後の感想には説明が必要でしょう。

このコンサートのテーマは、私たちの命は他の命の犠牲によって初めて生きることができるといふ、「命の連鎖」の法則でした。そして、コンサートのプログラムは、この法則を実行した人として、十字架で死んだナザレのイエスを「神の小羊」と呼ぶことで始まったキリスト教の信仰を、コラールとカンタータとオルガン曲によって、徐々に明らかにしていく構成になっていました。ですから、フィナーレに演奏された「おお、神の小羊、罪なく十字架の木に屠られ」というバッハのオルガン曲を聴いているときに、「愛は自己犠牲を喜びに変える」というメディタツィオのメッセージがひらめいたのでしょうか。

このような説明を読んで、バッハの森は「キリスト教会」なのかと「誤解」する方がいても不思議ではありません。しかし、カンタータもオルガン曲も、バッハの音楽は、キリスト教に関する知識がなければ、鑑賞も演奏もできないことを知ってください。彼がキリスト教の信仰を表現するために作曲したからです。しかし、バッハの森は教会と違って、一切「宣教」はしません。言い換えれば、誰にも「信じなさい」とは申しません。事実を事実として説明するだけです。ただ、事実そのものが、人の命の真相に関わることなので「感動的」なのです。

* * *

バッハの森には、北は北海道から南は沖縄まで、広く日本全国に、いや国外も含めて、百数十人の会員がいます。多くは遠方のため、バッハの森に来るのが難しい方々です。それでも、長年にわたり、何人かは創立以来、ずっと会員を続けていてくださいます。この方々が払い込んでくださる年会費の振替用紙を、私はいつもお一人お一人の顔を思い浮かべ、感謝と感動を覚えながら拝見しています。最近、その一人の方から送金されてきた振替用紙に「創立記念日のお祝い」と記されていました。遠くから、あの日のバッハの森で起きた感動を分かち合ってくれた仲間がいたことを知らされ、改めて胸が熱くなりました。さらに多くの皆さんが、私たちと感動を分かち合う仲間になってくださることをお待ちしております。(石田友雄)

愛が「命の連鎖」を回復する

*このメディタツィオは、去る3月20日に「創立記念コンサート」で朗読されました。

自然界の生物は、冬の厳しい寒さをじっと耐え、新しい命が生まれる春を待ちます。丁度そのように、イエス・キリストの復活を祝う復活祭の前には、彼の受難と死を想いながら復活祭を待つ40日間の受難節が定められています。本日のコンサートは、受難節が始まる週の、ラテン語で「エストミヒ」（私の砦の岩になってください）と呼ばれる日曜日のテーマを巡って構成されています。

復活したイエスと出会う

紀元30年頃、春分後の満月の夜に、ユダヤ人の慣習に従って、ナザレのイエスは、12人の弟子たちとエルサレムで過越祭の晩餐を祝いましたが、その夜、世の中の秩序を乱したかどにより、ゲッセマネの園で逮捕され、夜を徹して取り調べを受けた後、翌朝、ローマ人総督から死刑の判決を受けました。その結果、昼の12時に刑場ゴルゴタで十字架にかけられたイエスは、午後3時頃、十字架の上で絶命しました。その日の夕方、当局に願い出てイエスの亡骸を下げ渡された弟子たちは、その亡骸を刑場近くの墓に葬りました。それから3日目、日曜日の早朝、彼の亡骸に香料を塗るため墓に行った3人の女弟子たちは、墓が空になっているのを発見し、恐ろしくなって逃げ帰った、とマルコによる福音書は伝えます。

これに対して、他の3冊の福音書は、復活したイエスが弟子たちに現れた様子を報告しますが、決して同じことを語りません。それは、復活したイエスと出会うという経験が、個人であれ、グループであれ、エソテリックな、すなわち、限られた者だけに許される経験であり、誰でも同じように経験される一般的な事からではないことを示しています。

それにもかかわらず、その後、死んで葬られたイエスがよみがえったということだけが、神秘的な出来事、或いは、超常現象としてクローズアップされるようになりました。しかし、イエスの死後、彼こそメシア、すなわち、キリストだった、と覚った弟子たちが、本当に伝えたかったのは、別のことだったと理解すべきです。実際、そのことは、イエスの死から約20年後に宣教活動をしたパウロが、「キリストは私たちの過越の小羊として屠られた」と、コリント教会の信徒に書き送っていることから窺うことができます。

「過越の小羊」とは、紀元前13世紀頃、エジプトで奴隷の境遇にあえいでいたユダヤ人の先祖が、父祖の

神に助けられてエジプトから逃げ出したとき、神の命令に従って、小羊の血を入り口に塗っておいたので、彼らの家だけ死神が「過ぎ越し」という故事に由来する「犠牲の小羊」のことで、この「過越の小羊」のように、人々の命を救うため犠牲になって、イエスは十字架上で死んだのだ、と弟子たちは言いたかったのです。ですから、ヨハネによる福音書は、最初からイエスを「神の小羊」、ラテン語で「アニウス・デイ」、ドイツ語で「ラム・ゴッテス」と呼びます。

人の命を救うために死んだ「過越の小羊」は、勿論、後で息を吹き返したわけではありません。小羊が死ぬことによって、人間が生かされたのです。イエス自身も、「一粒の麦は地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば多くの実を結ぶ」と語っています。多くの実を結ぶことによって、死んだ一粒の麦は「復活」する、と教えているのです。

命の連鎖

犠牲となって死んだ命が別の命を生かした実例が、数週間前に北海道で起こりました。この報道をご記憶の方も多いでしょう。暴風雪のため動かなくなった車から降りて、吹雪の中を歩き出した父親と幼い娘が、家にたどりつく前に進めなくなり、避難しようとしたけれど、鍵がかかっていたため入れなかった倉庫の前で、父親は自分が着ていたジャンパーを脱いで娘に着せたうえ、娘の上に覆いかぶさり、彼女を寒さから守って救援を待ちました。翌朝幼い娘は無事救出されましたが、父親は凍死していました。

これは異常な状況下で起こった悲劇ですが、自然界を観察すると、それほど特別なことではありません。生物が自分の命を保つために食べる食物は、すべて生きているもの、言い換えれば、他の命なのです。自然界の生物は、他の命の犠牲によらなければ、自分の命を保つことができない仕組みの中で生きています。また、一粒の麦のたとえからも明らかなおと、自分の命を次の世代につなぐために、植物も動物も、親は自分の命を犠牲にして子に命を与え、その命を守り育てます。このように「命の連鎖」を守ることによって、自然界の生物は自分の命と種を維持しています。この全生物の存在基盤である「命の連鎖」を断ち切るものがあります。それは人間です。

吹雪の中で娘に自分の命を与えた父親のニュースが報道されていた頃、2人の少年がわずかな遊興費欲しさに、通りかかった若い女性を刺し殺すという事件が起こりました。このニュースに接して、何と愚かな少年たちかと慨嘆しましたが、同時に、同様な愚かさや人間界には蔓延している、と改めて考えさせられました。例えば、全世界を敵に廻して、ミサイルと核爆弾を熱心に製造している北朝鮮の指導者の愚かさです。仮に核爆

弾で周辺諸国を全滅させた場合、北朝鮮だけは生き残れると考えているのでしょうか。これは、あの2人の少年と同じくらい低レベルの愚かさです。少年たちが欲しかったものはわずかな遊興費、北朝鮮の指導者が追求しているのは自分の権力、どちらも、目先の欲望を満たすため他人の命を奪うことの重大さに気づかず「命の連鎖」を断ち切るにより、結局、自分自身を滅ぼすことが見えない人たちなのです。しかし、愚か者は彼らだけではありません。アメリカを初め、世界列強は皆、膨大な核爆弾を保有しています。一旦、それを使用したら、誰も地球上に住めなくなることが分かっている、抑止力という愚かな呪文から抜け出せないのです。

見えるようになりたい

さて、最初に申しあげたとおり、本日のコンサートは、受難節が始まる週の「エストミヒ」と呼ばれる日曜日のテーマを巡って構成されていますが、そのテーマは、何よりもこの日曜日のために定められた福音書の物語（ルカによる福音書18章31～43節）に示されています。この物語は、一見、相互に無関係な2つのエピソードから構成されていますが、読み終わると、2つのエピソードが一つの主題を巡って成り立っていることが分かります。

まず、最初のエピソードによると、イエスが12人の弟子を呼び寄せ、これからエルサレムに向かうが、そこで私は受難し、復活すると予告しました。しかし、弟子たちは、イエスが語ったことを何も理解できなかった、と伝えます。次に第二のエピソードは、エリコ近郊の道端に座っていた盲人が、人々の制止を聞かずに、「ダビデの子イエスよ、私を憐れんでください」と叫び続けたのでイエスが立ち止まり、「何をしてほしいのか」とたずねると、目が見えるようになりたいと答えました。そこでイエスが、「見えるようになれ」と言うと、たちまち盲人は見えるようになったというお話です。

ここで「見えない」とは「理解しない」、「見えるようになる」とは「理解できるようになる」ことを意味しています。弟子たちは、イエスが予告した受難と復活の意味を理解することができない、すなわち、見えなかったのです。しかも、自分たちが「見えていない」ことが分からないため、道端に座っていた盲人のように、「私を憐れんでください」と叫ぶこともしなかったため、「見えるように」なりません。イエスの受難を詳細に伝える「受難物語」は、イエスの思いを理解しないままエルサレムに上った弟子たちが、最後まで、いかにイエスの受難の意味を理解しなかったか、ということを語ります。

彼らが、イエスの死は、過越の小羊の死と同じように人の命を救うためだった、と初めて気がついたのは、復活したイエスに出会ったときでした。しかし、エリコ近

郊の道端に座っていた盲人は、見えるようになると「神をほめたたえながら、イエスに従った」と福音書は伝えます。これは、弟子たちが理解しなかったイエスの言葉を理解した盲人が、受難のためエルサレムへ向かうイエスに従って行ったことを意味しています。

愛の衝動

ナザレのイエスが、十字架の死を通して示した受難と復活は、「命の連鎖」に他なりません。それは、自然界の生物は守っているにもかかわらず、自分の欲望のため盲目になる愚かな人間には見えなくなる法則です。では、どうしたら、この愚かさを克服し、「命の連鎖」が見えるようになるのでしょうか。ここで再び、自分の命に代えて幼い娘の命を救った父親の行為を思い出してください。この事件を報道した記者は、父親がこの娘を大変可愛いがっていたというエピソードを付け加えました。父親が自分の命に代えて娘を救った理由を説明したかったのです。

実際、「命の連鎖」が自然の法則だと説明されても、自分が犠牲になることには、誰でもたじろぐでしょう。そもそも自己犠牲という言葉に、多くの人は、嫌だけれど致し方ないこと、というニュアンスを感じています。しかし、あの父親がいよいよ自分を犠牲にしたとは到底考えられません。恐らく反射的にジャンパーを脱いで娘に着せて覆いかぶさり、自分の身体で寒さから彼女を守ろうとしたはず。報道記者はそれを「可愛いがっていたから」と説明しました。勿論、その通りですが、私は彼の行為を「愛の衝動」と呼びます。時に人は、自分の命の危険を忘れて、危機に陥っている他人の命を救おうとします。ましてそれが愛する者だったらなおさらです。こうして、愛は自己犠牲を喜びに変えるのです。

ここで、エストミヒの使徒書（コリント人への手紙13章1～13）を読んでみます。それは、「どんなに素晴らしいことができても、愛がなければすべては空しい」と始まり、「終わりに残るものは、信仰と希望と愛の三つ。その中で最も大いなるものは、愛である」と結ぶ有名な「愛の讃歌」です。この使徒書は、イエスが弟子たちに語った受難が、彼の愛に始まった行為なのだ、と福音書を補足説明しているのです。そして、これが受難と復活を目指してエルサレムに上ったときに、イエスが弟子たちに伝えたかったことだ、と語っているのです。

これから私たちは、エリコ近郊の道端で、「私を憐れんでください」とイエスに向かって叫んだ盲人と共に、「主よ、すべての者の眼はあなたを待ち望んでいます」と歌います。勿論、目が開かれ、見えるようになることを待ち望んでいるのです。この盲人が見つけた「命の連鎖」に連なって生きる喜びを、ご一緒に追体験できるかもしれません。

(石田友雄)

一緒に学び、一緒に歌いましょう

メンバー募集中

現在、バッハの森クワイア・メンバーには、ソプラノ3名、アルト8名、テノール2名、バス3名、計16名が登録されています。それぞれの事情で毎週1回の練習に全員が集まることがなかなか難しく、指揮者としては、本番直前まで冷や汗をかいていますが、皆、本番に強く、その心配を感動に変えてくれる素敵なメンバーです。

以前は20名以上いたのですが、仕事や環境の変化で続けられない方が出てくるため、このところ年々減少傾向が続きました。特にテナーは、もともと少ない上に、皆さん多忙な方で、しばしば4声で練習できなくなります。テナー急募！と、キョロキョロ探している昨今です。もちろん、他のパートも募集中です。

好奇心に導かれて

このように現状は難しいのですが、理想はあくまでも高くありたいと思っています。20年前、私はキリスト教のキの字も知らない無知蒙昧な輩(ヤカ)でした。外国語はおろか、国語さえ怪しい未熟者でしたが、好奇心だけは旺盛で、勇敢にも、バッハの森の門をくぐってしまいました。そうしたら、初日から、音楽学校にはない、他では味わったことのない面白さに出会い、そのまま今日まで学び続けている次第です。キリスト教徒になったわけではありませんが、教会音楽の世界に対する興味が尽きません。

特に、聖書とバッハのカンタータの関係は好奇心をかきたてます。バッハのカンタータやオルガン曲に潜む、聖書の引用や隠喩を探し出すことは、まるでパズルを解く面白さです。さらに、その意味を考え出すと、これまで自分がものを考えずに生きてきたことを思い知らされ、このような遺産を遺してくれた優れた先人たちと、その学び舎であるバッハの森への感謝の念が湧いてくるのです。この調子で、来年、再来年、10年後、生きている限り、今見えないものが見えるようになるかもしれないと思うと、わくわくしてきます。

コンサートに向けたクワイアの練習のときは、つい音程や技術のことばかり言いがちで、この本質的な面白さを十分伝えられないもどかしさを感じています。見えないものを見えるようにするために、自分一人だけではなく、多くの人々の知識やひらめきを合わせ、一緒に表現方法を考えて、歌詞に籠められ

た思いのたけを合唱として歌い上げることが私の理想です。この理想に近づくためには、まず欠席や遅刻を避け、お互いの歌声と意見を十分に聞き合った上で、コンサートに臨むことが望ましいと思います。

より総合的に学ぶ勧め

ここで、クワイア・メンバーの皆さんに提案があります。もし皆さんがクワイアの練習だけではなく、その前後に開かれている「聖書を読む」と「コラールとカンタータ」の会に興味を持って参加して下さると、皆さんは、クワイアで歌う合唱曲の表現方法につながる何かを発見し、さらに深く探ることができるはずで、「コラールとカンタータ」の会では、教会暦の流れ、オルガンのためのコラール編曲、福音書とカンタータの関係などを学び、コラールを斉唱してカンタータに共感する楽しみを経験することなど、いろいろと学んだり感じたりすることができます。

「聖書を読む」は、“取っ付きにくい聖典”という先入観から敬遠する人が多いようですが、実際に参加してみると、西洋音楽の基礎知識を学ぶだけではなく、その独特の人間観察が大変興味深く、難しそうという印象は変わると思います。根気よく参加していれば、聖書がクワイアで歌う喜びと繋がるのがわかってくるでしょう。

今期は“Christ unser Herr zum Jordan kam”「我らの主キリストはヨルダンに来たり」(BWV 7)を中心に練習します。この曲に何が隠されているのか、毎週の練習と5月初めのワークショップで、ご一緒に探りながら、言葉を合わせ、声を合わせて、6月30日のコンサートに臨みたいと思います。クワイアの皆さん、宜しくお祈りします。そして、この文章を読んで、私たちと一緒に歌ってみたいと思ってくださった方、お待ちしております。

(比留間恵)

* * *

バッハの森でオルガンを学ぶ意味

アーレント・オルガンは最高の名器

オルガン音楽の演奏は、楽器の質に大きく左右されるように思います。それでは、「良いオルガン」とはどういうオルガンなのでしょう？ それは「オルガニストがいつまでも練習していたい楽器」であり、また、地球上で最も素晴らしい楽器である「人の声」に「良く寄り添える」オルガンだと思います。

そして忘れていけないのは、オルガンにとって、建物が楽器の一部である、ということです。

有名なヴァイオリニストが、名器を購入するために家を売却した、という話を聞いたことがあります。どうやらオルガニストには通用しない話のようですね。1989年に、石田一子先生に依頼されて、名工、ユルゲン・アーレントが建造したバッハの森のオルガンは、この三つの条件を見事なまでに体現している名器だと思います。

オルガンでどこまでしゃべれるか

オルガンは、「笛とふいごと鍵盤を持つ楽器」と定義することができますが、どこが名器かと聞かれれば、一本一本の笛が如何に「良い音」を持っているか、演奏者がその笛に鍵盤の上げ下ろし方法で、如何に「幅広い空気の送り方」が可能であるか、ということだと思います。

トランペットやフルート奏者が造り出す響きを想像していただければ良くわかると思いますが、吹き手によって音色が見事に変わりますね。それは、息の入れ方に由来している部分が大きいです。

鍵盤アクションが繊細な場合、同じ一本の笛であっても、指の使い方や空気の入力方、抜き方をコントロールできるので、笛の鳴り方を変えることができます。オルガンの笛には子音と母音がありますが、子音をどの位強く出すか、弱く出すか、母音をどのくらい伸ばすか、短く切るか、自由自在にコントロールできるようになると、演奏の幅がぐっと広がります。

特に、コラール変奏曲は、もともと歌詞のついた旋律に基づいて作曲されていますので、この子音と母音を音楽的に扱うことがとても大切になります。つまり、オルガニストが、どこまでオルガンでしゃべれるか、ということでしょうか。

コラールの歌詞を学ぶ重要性

そのようなわけで、私は、バッハのコラール作品に基づくオルガン曲を演奏する上で、「どうしても」コラールの歌詞を深く学びたくなり、バッハの森の門をたたいた次第です。そして、石田友雄先生から学ばせていただいたコラールの歌詞を理解しながら、流暢にしゃべってくれるアーレント・オルガンでコラール作品を演奏させていただくと、それはそれはたくさんの音楽的なことに気付かされるのです。

幸いにも、私は「教育楽器」として、歴史的にも最も高く位置付けられているクラヴィコードと、2万時間くらい親密に付き合ってきたおかげで、アーレ

ント・オルガンとの対話も比較的楽に成立しました。しかし大曲の演奏となると、学びたいことはまだまだ果てしなく広がっていきます。

私は、ライフワークの一つとして、バッハの『クラヴィアユーブング』第III部と取り組んでまいりましたが、この3年間、友雄先生に御教示いただきてまいりましたが、全27曲各曲の意味とその音楽的表現、それに曲集としての意味を理解し、演奏によってそれを体現するためには、まだまだ相当の時間を要すると思っています。

一子先生が私たちに示された見事なまでの献身と奉獻に基づく「バッハの森でオルガンを学ぶ意味」、それは、私にとって世界一贅沢なキリスト教音楽の追求以外の何ものでもありません。

(宮本とも子)

* * *

一緒に演奏する大きな楽しみ

バッハの森ハンドベル・クワイアは、毎週土曜日の午後7時～8時30分に練習しています。そのシーズンのテーマとなるコラールの旋律と編曲の合奏が、主な練習内容です。言うことは、クワイア（混声合唱）と同じテーマですから、ハンドベル・クワイアに先立って練習している合唱にも参加することが理想的で、これまで大多数のメンバーがそうしてきました。もちろん、都合がつかない方もいるので、合唱参加が絶対条件ではありませんけれど。

ハンドベルの最大の魅力は「皆で一緒に演奏する」という点です。1人が担当できるベルは、1曲につき多くても4～5個ですから、一つの曲を成り立たせるためには、必ず自分以外の誰かと「合わせる」必要があります。ここでの「合わせる」とは、単に「音を重ねる」ということに限りません。ハンドベルは文字通り「鐘」であり、単純な打楽器ですが、いつ誰が演奏しても同じように鳴るわけではありません。打点の高さや振り下ろすスピード、音を切るタイミングなどの微妙な調節によって、音色や強弱を自在に変化させることができます。それらを揃えることや、曲に応じて工夫することを、「合わせる」と考え、全員で聴き合い、話し合いながら練習を進めています。

歌って学ぶ音楽作り

ハンドベルは「楽器」ですが「歌うように」演奏することを、私たちは重視しています。大勢で演奏する打楽器のハンドベルでは、どれか一つの音が突

出したり、旋律の流れを損なったりしなように、皆が同じ「間合い」を感じる事が大切です。私たちはそれを「息」と呼び、実際にテーマのコラールを斉唱してからベルを振る練習に移ることで、「息」を共有するようにしています。コラール斉唱は、歌詞の内容を自然に体に染みこませてくれるので、より深く楽曲を理解し、表現するために役立ちます。「この音は歌詞のあの部分だから、こんな風に演奏したい」などと話し合いながら音楽造りをして、演奏を深めていくことは、とても楽しいことです。

ハンドベルは一人で演奏することが出来ません。ですから、このような音楽造りの喜びを分かち合う仲間がいることは、本当に嬉しいことです。28年前の創立と同時に始まったバッハの森のハンドベル・クワイアは、素敵な伝統を継承して充実した活動を続けてきましたが、一つだけ残念なことは、現在、参加メンバーが少ないことです。是非、もっと多くの方に、この楽しさを知っていただきたいと思っています。皆様のご参加をお待ちしております。

(岩淵倫子)

* * *

バッハの森の運営に参加しよう

会計士たちに見限られたバッハの森

巻頭言で報告したとおり、新法人に移行せよ、と通知されてから数年間、移行手続きを依頼するため、何人もの会計士と相談しました。後でわかったことですが、会計士なら誰でも知っている手続きだと思ったのは誤解でした。新しい法律を、すべての会計士が正しく理解していたわけではなかったのです。そのため、一昨年秋、東京のコンサルタント会社と契約するまで相談した会計士たちは、バッハの森の経営状況を調査した後、手を引いてしまいました。

中には、こんな脆弱な財政基盤では、新法人の認可は受けられないと、明言した人もいました。そう聞かされたときは、このままではバッハの森が終わると思い込み、どこかの法人にバッハの森を寄付できないものかと、本気で考えたことすらありました。

幸い、これは会計士の誤った判断だったので、一応、新法人に移行できたわけですが、この騒ぎを通じて、バッハの森の経済状況について、再確認したことが2つあります。まず、バッハの森は、会計士の皆さんの常識的判断によれば、いつ倒産してもおかしくない状況の団体だということです。次に彼らが理解しなかったことは、そのような団体が28年間も活発に

活動を続けてきたという事実です。

危ういけれど存続するバッハの森

この2つの状況は、バッハの森の存立目標と密接に関わっていますが、まずは、どのように「危うい経済状況」なのか、説明いたします。バッハの森は、土地(借地)、建物、楽器などを所有しており、これを維持するためのお金と、活動するための電話、コピー機などのリース代、その他の事務費を必要としています。他方、収入は、管理棟とゲストハウスの賃貸料の他は、会員の会費(年会費と研究会の参加費など)と寄付、それに会員が使用するオルガンやコピー機の使用料、コンサートや「コラールとカンタータ」などの参加費です。

本来、バッハの森のような非営利団体は、基金の収益で運営されるべきであり、バッハの森も創立時、基金を創設するつもりで「文化財団」と名乗ったのですが、いろいろあった末、結局、500万円の基金しかできず、今日に至りました。基金として役立つ金額でないことは言うまでもありません。そこで、新法人名から「文化財団」は省きました。しかしながら、創立以来、バッハの森は、政府、自治体、企業、他の団体などから経済的援助を受けたことは一切ありません。バッハの森の運営原則に従って、完全に会員たちが「自腹を切って」運営してきました。

ですから、バッハの森の最も重要な財源は、会員の会費と寄付、使用料と参加費です。ところが、バッハの森は入退会が自由で、いつでも入会できるけれど、いつでも退会できる団体ですから、会計士の皆さんには、財源が全く不安定な組織に見えたようです。確かに「経済状況」が「危うい」団体です。しかし、同時に、バッハの森を必要とする会員がいる限り存続する組織なのです。

年間の支出と収入

そのようなわけで、創立以来、会員の皆さんが、会費と参加費と寄付によって、バッハの森を支えてきてくださったことは紛れもない事実です。ただ、会計事務は、いつも数人のヴォランティアの会員が、黙々と「縁の下の力持ち」になって処理してきてくださいました。そのため、一般会員の皆さんは、必ずしもバッハの森の「危うい状況」についてご存知ないようです。この際、より広く会員の皆さんに、経済問題にも関心を持っていただくことが、全員参加を原則とするバッハの森を運営するために、大切なことだと考えました。

そこで、バッハの森が1年間にいくらお金を必要

とし、その支払いのためにどうやってお金を集めているか、ということを知っていただくために、最近数年間の平均から算出した年間の収支計算をしました。創立以来、毎年「バッハの森通信」の7月号とホームページに収支報告を公表してきましたが、記載方法が「専門的」で少々わかり難くかっと思ひます。そこで、今回は家計簿的、出納帳的な平易な収支計算書にしました。数字は苦手と言わないで、読んでみてください。質問があればお答えします。

支 出 (年間)

土地	
地代	80 万円
地上権 (積み立て)	12 万円
建物	
外壁塗装と修繕	150 万円
植栽 (庭、樹木)	20 万円
エアコン、ガスストーブ (積み立て)	30 万円
固定資産税、法人事業税など	26 万円
火災保険など	12 万円
楽器	
オルガン、その他 (調律、維持)	18 万円
事務	
リース (電話機、コピー機など)	42 万円
パソコンなど (積み立て)	6 万円
通信費 (電話、切手、サーバーなど)	16 万円
印刷費 (「バッハの森通信」など)	9 万円
報酬 (会計士)	15 万円
給料 (2 名)	100 万円
運営	
光熱水料費 (冷暖房費を含む)	60 万円
講師謝金と交通費 (2 名)	110 万円
消耗品費 (プログラム、資料など)	20 万円
	計 726 万円

収 入 (年間)

会費	
年会費 (維持会員：90 人、賛助会員：50 人)	100 万円
研究会費 (クワイアなど)	160 万円
公開プログラム	
コンサート、コラールとカンタータ	30 万円
ワークショップ	10 万円
楽器使用料	
オルガン、クラヴィコード	40 万円
雑収入	
コピー代、宿泊代など	6 万円

賃貸料

ゲストハウス、管理棟	180 万円
寄付	
地上権、建物維持 (積み立て) 他	130 万円
	計 656 万円

赤字解消策を、ご一緒に考えていただけませんか

御覧の通り、収支計算をすると、年間 70 万円の赤字です。この調子で 28 年間、「石田銀行」から無利子、無期限の借金で赤字を補填してきたら、積もり積もって約 4000 万円になりました。ただし、無利子、無期限の借金というのは寄付みたいなものですから、今は忘れておきましょう。

差し当たってご一緒に考えたいのは、どうやって年間 70 万円の収入を増やしたらいいか、ということです。私は次の 3 つの提案をします。(1) より多くの会員が、合唱、研究会、コンサートなどに参加する。(2) 会員数を増やす。現在数 140 人を、せめて 7、8 年前の 200 人に戻す。(3) 各会員が寄付を増額する。このうち (1) と (2) は推進したい方法ですが、(3) はその場しのぎなので感心しません。

この他に、バッハの森の素晴らしい建物とオルガンなどの楽器を、もっと活用できないか、という話があります。この場合、誰が何をどうやってするか、が問題です。よいご提案があったら、是非聞かせてください。お待ちしております。

(石田友雄)

1. 10 開講 春のシーズン
 1. 10, 17, 24, 31 運営委員会 参加者4名、4名、4名、3名。
 1. 27 来訪 横浜プラスオルケスター 8名。
 2. 7, 14, 21, 28 運営委員会 参加者2名、3名、4名、4名。
 2. 8 来訪 月本昭男氏(立教大学教授)、山田重朗氏(筑波大学教授)。
 2. 12 来訪 フランセス・C・フィッチ氏(チェンバリスト)。
 3. 5 来訪 加藤拓未氏(明治学院歴史資料館)、堀切麻里子氏(オルガニスト)。
 3. 7, 14 運営委員会 参加者3名、4名。
 3. 9 理事会・評議員会 財団法人筑波バッハの森文化財団 出席者10名。
 3. 15 来訪 鯉淵俊男氏(エターナル・バプテスト教会牧師)。
 3. 20 創立記念コンサート 参加者48名。
 3. 24 春休みの音楽会 参加者24名(大人)、2名(子供)、3名(幼児)、計29名。
 取材 岡野賢一氏(常陽ウィークリー)。
 3. 25 来訪 長谷川美保氏(オルガニスト)、加藤拓未氏。
 春期休館：3月25日～4月11日

J. S. バッハの音楽鑑賞シリーズ コラール・カンタータ研究 コラールとカンタータ (JSB)

1. 12 新年後主日のためのクリスマス・オラトリオ「栄光があなたにあるように、神よ、と歌おう」(BWV 248/V)；コラール「空の星々よ、輝く空よ」。オルガン：J. S. バッハ「誠にそのような心の部屋は」(BWV 248/53)、笠間きよ子。参加者12名。
 1. 19 第348回、オルガン：J. G. ヴァルター「天地の神は」、笠間きよ子。参加者14名。
 1. 26 第349回、顕現祭後第2主日のためのカンタータ「あゝ神よ、どれほど多くの心の悩みが」(BWV 3)；コラール「数々の悩み襲い来たれども」。オルガン：J. G. ヴァルター「あゝ神よ、どれほど多くの心の悩みが」、J. S. バッハ「私の心を信仰のうちに清く保ってください」(BWV 3/6)、安西文子。参加者14名。
 2. 2 顕現祭後第3主日のためのカンタータ「すべてはただ神の御意志に従い」(BWV 72)；コラール「絶えず御意志のなること願う」。オルガン「私の神がのぞまれること、それが常に起こりますように」(BWV 72/6)、當眞容子。参加者12名。
 2. 9 第350回、オルガン：F. W. ツァハウ「私の神がのぞまれること、それが常に起こりますように」、當眞容子。参加者11名。
 2. 16 七旬節のためのカンタータ「私は私の幸いで満足しています」(BWV 84)；コラール「誰か知る、終わりの」。オルガン：J. S. バッハ「この間に私はあなたにあって満足して生き」(BWV 84/5)、安西文子。参加者12名。

2. 23 第351回、オルガン：J. S. バッハ「愛する神にのみ支配させる者は」(BWV 690)、安西文子。参加者13名。
 3. 2 エストミヒのためのカンタータ「イエスは12弟子を呼び寄せ」(BWV 22)；コラール「主なるキリスト、神のみ子は」。オルガン：J. S. バッハ「あなたの慈しみによって私たちを死なせ」(BWV 96/6)、海東俊恵。参加者12名。
 3. 9 第352回、オルガン：J. S. バッハ「主なるキリスト、神のみ子は」(BWV 601)、海東俊恵。参加者12名。
 3. 16 第353回、パルマールムのためのカンタータ「天の王よ、歓迎いたします」(BWV 182)；コラール「主の苦しみと痛みと死は」。オルガン：J. G. ヴァルター「イエスの受難と痛みと死は」、「イエスよ、あなたの苦しきは」(BWV 159/5)、當眞容子。参加者15名。

学習コース

- バッハの森・クワイア(混声合唱) 1.12/12名、1.19/12名、1.26/12名、2.2/11名、2.9/10名、2.16/9名、2.23/12名、3.2/14名、3.9/15名、3.16(ゲネプロ)/16名。
 バッハの森・ハンドベル・クワイア 1.12/4名、1.19/4名、1.26/4名、2.9/4名、2.16/5名、2.23/5名、3.2/5名、3.9/7名、3.16/7名、3.23/3名。
 バッハの森・ハンドベル・リンガーズ 1.10/3名、1.17/3名、1.24/2名、1.31/2名、2.7/2名、2.14/3名、2.21/3名、2.28/3名、3.14/3名、3.21/3名。
 コラール研究会 1.11/6名、1.25/6名、2.1/5名、2.15/5名、3.1/5名、3.15/7名。
 オルガン音楽研究会 1.11/7名、1.25/6名、3.1/6名、3.15/9名。
 クラヴィコード・オルガン教室 1.11/3名、3.1/4名、3.15/5名。
 オルガン・クラブ 1.18/3名、2.1/2名、2.8/3名、2.22/3名、3.8/3名。
 入門講座：聖書を読む 1.12/4名、1.19/5名、1.26/5名、2.2/6名、2.16/4名、2.23/4名、3.2/6名、3.16/5名。
 オルガン、クラヴィコード練習 1.8/2名、1.9/1名、1.10/1名、1.12/1名、1.15/2名、1.16/1名、1.17/2名、1.19/1名、1.22/3名、1.23/1名、1.24/3名、1.25/1名、1.26/2名、1.29/1名、1.30/1名、2.1/1名、2.2/1名、2.5/2名、2.6/3名、2.8/2名、2.9/1名、2.12/3名、2.13/4名、2.15/3名、2.16/1名、2.19/4名、2.20/3名、2.21/1名、2.22/2名、2.23/1名、2.25/1名、2.26/4名、2.27/2名、2.28/3名、3.1/2名、3.2/3名、3.5/4名、3.6/2名、3.7/1名、3.8/2名、3.9/1名、3.12/3名、3.13/1名、3.18/1名、3.19/1名、3.22/2名、3.26/1名、3.27/1名、3.28/1名。